異世界(いせかい)で
カフェを開店(かいてん)しました。
⑦

甘沢林檎(あまさわりんご)・作

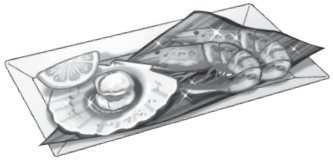
ななミツ・絵

アルファポリスきずな文庫

Contents

もくじ

プロローグ……6
第一章　休みの前に終わらせましょう。……11
第二章　バカンスが始まります。……18
第三章　思わぬハプニングが起こりました。……32
第四章　新鮮な海の幸はおいしいです。……52
第五章　夏はやっぱり海水浴です。……62
第六章　居ても立ってもいられません。……78
第七章　海の家を開店しました。……100
第八章　宿泊客が増えました。……110
第九章　招かれざる客がやってきます。……117
第十章　善悪の報いは必ずあります。……129
第十一章　彼は親しみやすい人でした。……139
第十二章　なぜか気に入られてしまいました。……154
第十三章　夜の海は幻想的です。……166
エピローグ……173
カフェ・おむすびは本日も営業中です。……180
番外編　ある少女の憂鬱……197
あとがき……242



Character
登場人物
ジーク
元騎士。リサの作るスイーツが大好きなあまり、カフェの店員に。リサの恋人。
アラン
フェリフォミア王宮の厨房で見習い料理人をしていたが、ジークに憧れてカフェの店員に。
ウィルフレッド
隣国スーザノウルの公爵。リサに興味があるようで……？
リサ
「女神様の思し召し」で、パジャマ姿で異世界にやってきたこの本の主人公。オープンした「カフェ・おむすび」が大人気。
オリヴィア
街で倒れたリサを助けた縁で、カフェの新たな店員になった一児の母。
ヘレナ
元はパン屋の娘だったが、色々あって現在はカフェの店員。
バジル
リサが異世界に来た日からそばにいる緑の精霊。

プロローグ

静かな室内には紙を捲る音だけが聞こえる。
背もたれの高い椅子に座っている男性が手に持った本のページを捲る音だった。
俯き気味の彼の頬に、赤銅色の髪がはらりと落ちてくる。
それでも、彼の目は本のページから離れない。集中していた。
そこに、コンコンとノックの音が響く。
返事を待つことなく、部屋のドアが開いた。
「ウィルフレッド様、……ウィルフレッド様！」
二度呼びかけられて、ようやく椅子に座る男性は顔を上げた。
「何の用だ、ニコラス」
「何の用だ、じゃないですよ！　今日までに目を通してくださいとお伝えしたものは済んだのですか？」
「まだ今日は終わってないだろう」

「そう言って、いつも後まわしにするじゃないですか！　そもそもあの積み上がった机からその書類を探すことができるんですか!?」
「積み上げてくるのはお前だろうが、ニコラス」
「普段からまめに目を通してくだされば積み上がらないのですよ！」
「あー、はいはい、わかったわかった」
なんと返しても続くだろう小言にうんざりした男性――ウィルフレッドは、投げやりに言った。
執務机にある書類の山は、ウィルフレッドが手をつけない限り一向に減らないのだ。
はぁ、とため息をついて本を閉じる。
机の端に本を置いて、渋々ながら積み上がった書類の一番上のものに手を伸ばした。
「……こちらの本は、先日取り寄せたものですか？」
ニコラスは本の表紙に目をとめたのか問いかけてくる。
「ああ、ようやくな」
「私も少し拝見してもいいですか？」
「いいぞ」

許可を出すとニコラスは本を手に取り、開いた。
「……これは、ウィルフレッド様は意味がわかるのですか？」
「さっぱりわからん！」
「それなのに読んでおられたのですか……」
「わからないながら想像していたんだよ。料理などしたことがなくて食べる専門だからわからんのも道理だが」
「先に料理人に渡した方がいいのでは？」
「そうするか。私が持っていても宝の持ち腐れだからな」
「では私の方から渡しておきます」
「ああ、頼んだ。できるならフェリフォミアで実物を食したいんだがなぁ……」
「ご存知でしょうがもうすぐバカンスシーズンですよ？」
「わかっている。さすがに観光客がたくさんやってくる時期に領地を空けようとは思っていない」
窓の外に視線を送ると、日に日に強くなる日差しが室内に入り込み、遠くに見える青い空には白い綿のような雲が浮かんでいた。

初夏ならではのいい天気だ。
「今年は何も問題が起きないといいのですが……」
「そんなことを言うと余計に起きそうだな！」
ニコラスの弱気な言葉にウィルフレッドが笑い混じりに返すと、ニコラスはムッとした表情になった。
「私の記憶によると、去年の問題の半分にウィルフレッド様が関わっていたと思いますが」
「ははは、私の記憶にはないなぁ」
ウィルフレッドは顔に笑みを貼り付けて、きっぱりと言い切る。
問題の渦中にいたことはあるものの、問題そのものを起こしたことはさっぱりないのだ。
ニコラスはそんなウィルフレッドの様子に深くため息を吐く。
「とにかくバカンスシーズンがはじまる前に片付けておくべきことがたくさんありますからね！　まずは山積みのこの書類をどうにかしてください！」
「わかったわかった」
あらためてウィルフレッドは手に持った書類に目を向ける。

だが、頭の中は未だに、先程まで読んでいた本の内容でいっぱいだった。
『カフェ・おむすびの基本レシピ集』
隣国フェリフォミアから取り寄せた本には、ウィルフレッドが食べたことのない名前の料理が並んでいた。
どんなに早くても話題のお店に行けるのは、バカンスシーズンが終わった秋になるだろう。
そのためには、目の前の仕事を片付けなければならない。
ちらりと積み上がった書類の山を見る。
その量にウィルフレッドは顔を顰めた。
だがやらないことには、その山はなくならない。
辟易した気持ちをどうにか切り替え、今度こそ目の前の書類に集中した。

第一章　休みの前に終わらせましょう。

「リサ先生さようなら〜」
「また新学期にね！」
勉強道具が詰まった鞄を手に、教室を出て行く生徒たち。リサは一人一人と挨拶を交わし、ウキウキと弾むような足取りで帰っていく彼らを見送った。
明日から料理科を含む学院の全学科は、夏休みに入る。
リサの育った日本と違い、フェリフォミア王国では、学年の始まりは秋。そのため、生徒たちは夏休み明けに進級することになる。
一年の集大成である学年末テストをクリアし、長い休暇に入る生徒たちは浮き立っていた。
何しろ夏休みは二ヶ月半もある。その間、友人と遊んだり、家族と過ごしたりと、学業から解放されて思う存分羽を伸ばすことだろう。
かくいうリサも、一週間後にカフェ・おむすびのメンバーと旅行に行く予定だ。

二号店騒ぎもつい先日、『カフェ・お米』の廃業とともに収束した。騒ぎが続くようなら旅行を延期することも考えたが、そうせずに済んで一安心だ。

教室から職員室に戻ったリサは、窓辺でお茶を飲む老年の男性に目を留める。

彼も職員室にやってきたリサに気が付いたのか、持っていたカップを置き、リサの方を向いた。

「リサ先生、生徒たちは帰りましたかね？」

「はい、それはもう嬉しそうに」

「ほっほっほ、そうかそうか」

穏やかに笑う彼は、セビリヤ・コルン。料理科では動植物学の講師を務めており、屋外での農業実習も担当している。

かつては国立の研究所にいた著名な研究者だが、リサの誘いを受けて後進に立場を譲り、教鞭を執るようになった。

リサは彼から食材のことを教えてもらったり、授業や生徒のことで相談に乗ってもらったりと、その道のプロとしてだけではなく、人生の先輩として頼りにしていた。

「リサ先生もバカンスに行かれるのですよね」

「はい、カフェ・おむすびのメンバーで十日ほど」

「スーザノウルに行くんでしたかの？　あそこは温暖でいい国ですよ。フェリフォミアとはまた違った文化が築かれていて、植生も違いますからのう」

「そうなんですか？　暖かいとは聞いてましたが」

「私も行ったのはだいぶ昔なのでね、今は様変わりしたところもあると思いますが、海が綺麗だったのが記憶に残っていますよ」

「私たちが行くところも海が綺麗で有名らしいです。王都にいるとなかなか海を見る機会がないので、楽しみです」

研究者だったセビリヤは、植物の研究のために世界中を旅したことがあるらしい。今回リサたちが行く隣国のスーザノウルにも、もちろん行ったことがあるようだ。

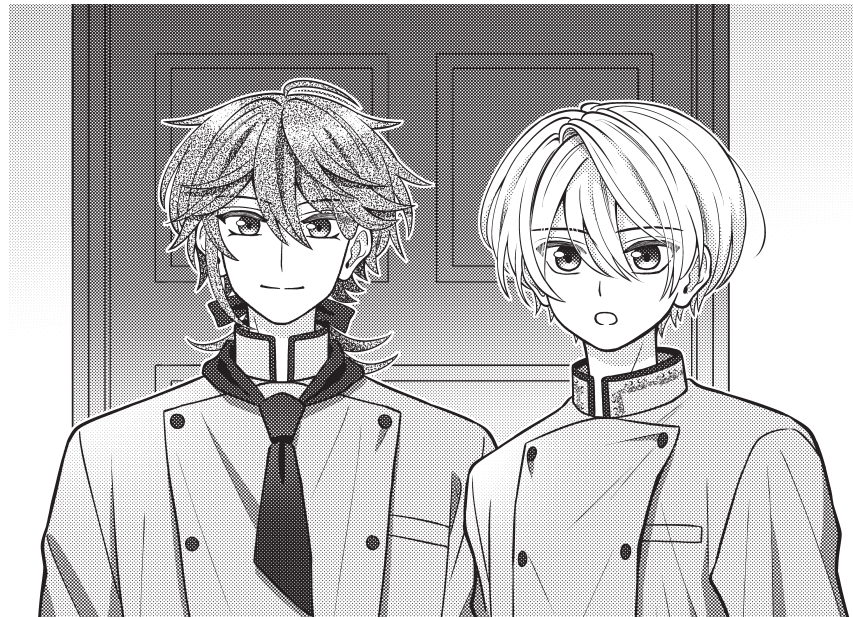
そんな彼とのほほんと会話をしていたら、職員室に二人の男性が入ってきた。

「リサ先生、点検終わりました」

「二人ともありがとう、お疲れ様～」

一人はカフェ・おむすびのメンバーでもあるジークだ。料理科では製菓の授業を担当している。

そしてもう一人は、茶色の長いくせ毛を後ろで束ねている男性だった。
彼はキース・デリンジェイル。元王宮の副料理長で、調理技術の授業を担当している。気安い雰囲気があって話が上手いので、生徒からも人気があった。
「リサ嬢、オーブンが一台だけおかしいから、修理に来てもらった方がいいと思う」
「そうだね。ちょっと調子悪そうだったもんね」
リサが最後の授業をしている間、ジークとキースの二人には調理室の器具や機材の点検をお願いしていた。学期中に消耗してしまったものや新たに発注する必要があるものを洗い出し、大きな機材に関しては夏休み中



に修理しておくためだ。
まだ料理科を創設して一年目とはいえ、ほぼ毎日使う機材は消耗も激しい。けれど、授業のある学期中は業者に修理などを依頼する時間がどうしても限られてしまう。そのため長期休暇の間にしっかりと設備を整えて、来期に備える必要があった。
「それじゃあ、修理依頼しておくね」
「おう、よろしくな。あと、来期からの講師の件だけど――」
「ごめんね、キースくんに任せっきりで。それでどんな感じ？」
「何人かよさそうな人材を選んで、その中で本人の了解を取れたのが三人ってところかな。これがそのリスト」
「ありがとう、本当に助かる」
夏休みが明けると新入生が入ってきて、二学年の二クラスとなる。
そのため講師の増員が必要となり、リサはその人材の選定をキースにお願いしていた。
それというのも新しい講師は、キースがかつて所属していた王宮の厨房から引き抜くことにしたからだ。
「マキニス料理長には迷惑かけちゃうけど、大丈夫かな？」

「料理長は快く了解してくれたぞ。しっかりと技術を身につけたひよっこたちが数年後に料理人として就職してくれるなら安いもんだって」

「そう？　だったらいいんだけど……」

マキニスは王宮の総料理長で、リサも以前から何かとお世話になっている人物だ。

その彼が言う通り、料理科を卒業した生徒はかなりの割合で王宮の厨房に就職するだろう。リサの経営するカフェ・おむすびという進路もあるが、小さい店だし雇える人数も限られる。

その点、毎年新たな見習いの料理人を雇い入れている王宮の方が就職しやすい。王宮側としても、学院で技術を学んだ人材が入って来るならば大歓迎だと思う。

リサは、マキニスもそう考えてくれているらしいことを知り、気が楽になった。

二ヶ月半まるまる休みの生徒たちとは違い、講師陣は夏休み中もやらなければいけないことがたくさんある。

講師の補充もそうだが、来期のカリキュラムの打ち合わせに、機材や食材の手配。そして何より、新入生の入科試験の採点と合否判定だ。

試験自体は既に終えている。入科希望者は昨年の約二倍。昨年も狭き門であったが、今年はそれを凌ぐ。

講師の人数や設備面の問題もあって一クラス二十人という定員を増やすことも出来ず、リサたちは頭を悩ませていた。

今日はこれからそのことについての会議を行う。

この一週間で合格者を選び、受験生たちに合否を知らせる手紙を送る。それが終わると、リサたち講師陣も晴れて夏休みだ。

「では、会議を始めますか」

「子供たちの将来がかかった大事な会議じゃな」

リサの言葉を聞いて、窓辺のソファに座っていたセビリヤが立ち上がり、自分の机に移動する。他の三人も各々席に着き、話し合いを始めるのだった。

第二章　バカンスが始まります。

「みんな忘れ物はない？」
リサがカフェの前に揃ったメンバーを見て、声をかけた。
学院の夏休みが始まって一週間後。
リサを含むカフェ・おむすびのメンバーは、朝早くから店の前に集合していた。
全員が大きな旅行鞄を持っている。
そう、これから十日間の慰安旅行へ出発するところなのだ。
行先は、隣国スーザノウルのマスグレイブ領という土地。海が綺麗な人気のリゾート地だ。
「ヘレナちゃん、馬車でどのくらいかかるの？」
オリヴィアの息子のヴェルノがヘレナに聞く。
「そうねぇ、一日半くらいかな？」
目的地まではヘレナの言うように、馬車に乗って一日半。途中で一泊し、明日の昼過ぎ

には到着する予定だ。
「あの馬車かしら？」
そう言ったオリヴィアの視線の先から、二頭立ての馬車が近づいてくるのが見えた。
パカパカと蹄の音を鳴らしてやってきた馬車は、リサたちの前で停まる。
「おはようございます。貸し馬車協会のバートラムと申します。カフェ・おむすびの皆様でお間違いないでしょうか？」
御者席から降りてきた男性がかぶっていた帽子を取り、リサたちに話しかけた。
「はい、そうです。よろしくお願いしますね」
「かしこまりました」
バートラムと名乗った男性はお辞儀をすると、荷物を積み込む作業に取り掛かる。
リサたちが移動手段に選んだのは、貸し馬車だった。乗合馬車や辻馬車という手段もあり、そちらの方が料金も低めなのだが、今の時期はどこも混み合っている上に、大所帯で移動するには不便だ。それならばと奮発して、御者のついている貸し馬車を手配したのだった。
フェリフォミアの王都の中は、馬のいない魔術式の馬車が走っている。だが長い距離

を移動するには、まだまだ馬に頼らなければならないらしい。
八人乗りの馬車に、御者のバートラムとジーク、アランが協力して荷物を積んでいく。
馬のすぐ後ろに御者席があり、その後ろが箱型の座席になっている。その左右には中に乗り込むためのドアと、窓があった。
二人掛けの席が四列並んでいて、荷物は最後尾の席に積み込むことにする。
やがて荷物を積み終えると、カフェのメンバーは一人ずつ馬車に乗り込んだ。
一番前の列にリサとジーク。二列目にオリヴィアとヴェルノ。そして三列目には、ヘレナとアランが座った。
「それでは出発いたします」
バートラムが御者席の後ろの小窓から一言告げて、馬を走らせる。ゆっくりと走り出した馬車に乗って、リサたちは旅立った。

スーザノウルまでは平地が続き、難所は特にない。馬車も動力こそ馬だが、魔術で揺れが抑えられているため快適な旅路だった。
街道自体が綺麗に整備されていることも大きい。

リサは王都から初めて出るので知らないことばかりだったが、騎士団時代に演習などでいろんな場所へ行ったことのあるジークがあれこれ教えてくれる。
「ここを北に行くと、ミルクの産地なんだね」
「王都に出荷されるミルクは、ほとんどこのあたりで採れたものだと思う。ほら、あそこの山肌一面に生えているのがミルクの木だ」
そう言って、遠くに見える山を指さすジーク。リサはその方向を見て目を凝らした。
カフェ・おむすびに欠かせないミルクの実だが、こうして産地の近くを通りかかったり、実際に木に生っているところを見るのは初めてなリサは、興味が尽きない。
七歳のヴェルノと一緒にあれは何？　これは何？　とジークに質問しまくっていた。
「あと、この辺は牧畜が有名だな」
「じゃあ乳製品が特産なの？」
「乳製品？　育った動物は主に食肉として出荷される」
「そっか、ミルクの実があるから、こっちの世界では牛乳は飲まないんだった」
時折、こういった常識のずれもあったりする。こちらの世界に来て約四年経ったが、まだまだ知らないことの多いリサだった。

「ところで、これから向かうスーザノウルの特産物といえば、何が有名なの？」
「マスグレイブ領なら、海産物かな？」
「やっぱりそうなんだ」
「あと俺も詳しくはないが、パンの原料がフェリフォミアとは違うって聞いたことがある」
「へぇ、小麦粉じゃないの？」
「そうらしい」
「米粉とかかなぁ？」
この世界に来た時に食べたカチコチパンが頭をよぎるが、まさかね、と思い直してリサはジークと話を続けた。

やがてお昼になったので、一度街道沿いに馬車を停めて昼食をとることにした。
馬車の中は狭いため、草の生えている柔らかい地面に布を敷く。
わあっと言いながら布の上に寝転がったヴェルノを見て、みんなが笑う。そんな息子をオリヴィアが窘め、それぞれ座った。

リサは自宅から持って来たバスケットを馬車から下ろし、中身を広げる。今日は一日中移動なので、昼食を持参したのだ。
リサが作ってきた昼食は、手軽に食べられるサンドイッチだ。それと、瓶に入ったリルの実のジュースも用意してある。
「バートラムさんもよかったらどうぞ」
「よろしいのですか？」
「はい。たくさん作ってきましたから」
リサが言った通り、バスケットの中にはサンドイッチがぎっしりと詰まっている。
「では、いただきます！」
リサの号令で手を合わせたメンバーは、各々サンドイッチに手を伸ばした。
具は卵、ハムとチーズ、照り焼きチキンといったスタンダードなものばかりだが、みんなおいしそうに頬張っている。

「おいしいね～」
口の端に卵とマヨネーズを付けながら、微笑むヴェルノ。
「こうやって外でご飯を食べるのも、気持ちいいですね！」
ヘレナが優しく頬を撫でる風に目を細める。
「そうねぇ、王都にはこういう場所はないし」
オリヴィアがヴェルノの口元をナプキンで拭いながら言った。
周りに見えるのは通ってきた街道と、緑の絨毯のような牧草地。少し離れたところには、放牧している動物が逃げないように木製の柵が設けられている。
そしてずっと遠くには、放牧されている牛らしき動物が米粒よりも小さく見えた。
聞こえるのは、時折草や木が風に揺れて擦れる音くらいである。
王都にも公園や広場はあるものの、これほど見晴らしがよく、自然豊かで静かな場所はない。
都会には都会のよさがあるが、街の外に出なければ見られない風景や自然もある。
「俺の田舎がこんな感じっすね～」
「そっか、アランくんは王都出身じゃなかったね」

口をもぐもぐ動かしながら言うアランの言葉で、リサはそう言えば、と思い出す。
「はい。まああっちは畑が多いから、雰囲気は少し違いますけど」
「確か王都の隣町ですよね？」
ヘレナが問うと、アランは咀嚼していたものを呑み込み頷いた。
「ちょうど反対側にある町だよ。隣って言ってもだいぶ離れてるけど」
アランの田舎の話や、仕事柄いろんな場所を知っているバートラムの話を聞きながら、リサたちはピクニックのようなランチタイムを過ごした。

何度か休憩を挟んで、夜にはフェリフォミアとスーザノウルの国境の町に到着した。
今日はここで一泊する予定だ。
予約していた宿に着くと、リサとヘレナ、オリヴィア親子、ジークとアラン、そして御者のバートラムと部屋ごとに分かれる。
それぞれ部屋に荷物を置いてから再び集合し、宿の食堂で晩御飯を食べることにした。
食堂は多くの宿泊客で賑わっている。バカンスシーズンということもあり、部屋も満室のようだ。

リサたちが空いている席に座ったのを見て、ウェイトレスの女の子が近づいてきた。
「七名様でいいですか？」
「はい」
「では、少々お待ちを～」
なぜ人数確認？　と不思議に思っているリサを他所にジークがささっと答えると、女の子は厨房の方へ向かった。
戸惑っているのはリサだけで、他のみんなは気にしている素振りはない。
「ジークくん、注文はしなくていいの？」
リサはきょろきょろと周りを見回しながら、隣に座るジークに聞く。すると彼は一度首を傾げた後、納得したようにああ、と呟いた。
「こういう店は、出す料理が決まってるんだ。だからカフェみたいにメニュー表はないし、注文を聞くこともない」
「そうなの!?」
「ああ。メニューがたくさんあると使う材料も多くなるし、作るのも大変だろう？　大規模な宿ならまた別だが、このぐらいの宿や飲食店はだいたいこうだよ」

「へえ……」
初めてカフェ・おむすびに来た客は、メニュー表を見て戸惑うことが多い。メニューの数が多すぎて、どれを選べばいいのか迷うのだという。
リサは、その理由を初めて実感した。
この食堂などメニュー表自体がないくらいなのだから、メニュー表にたくさんの料理名が並んでいるカフェ・おむすびは特異な存在だろう。
リサは飲食店といえばメニュー表があって、そこから注文する料理を選ぶものと思っていたが、こちらの世界の場合はそうではない。
さすがに王都にある店の多くは二種類くらいはメニューがある上に、リサ自身は外食をそれほどしないので、久々にカルチャーショックを受けた。
「お待たせしました～」
そうこうしているうちに、先程のウェイトレスがお皿を両手に持ってやってきた。
ジークの言った通り、全員の前に同じものが一皿ずつ置かれていく。
「今日のメインは、お魚の塩焼きだよ～」
白いお皿からはみ出るくらいの大きな魚だ。

シューゼットというキャベツに似た葉物野菜が浮かんだスープと、丸いパンがついている。

――久々に出た！　カチコチパン!!

リサは懐かしさを覚えながら、パンを持ち上げた。

ちょっと笑いがこみ上げてくるが、これが今日の主食かと思うと少し切なくなる。

全員分のお皿が運ばれてきたところで、食べ始めることにした。

メインの焼き魚にフォークを入れる。皮の表面に振ってある塩に焼き色がついていて、パリッとしていた。

一口掬い上げて頬張る。

「……あ、おいしい」

見る限り調理法は至ってシンプルで、内臓を取り出した魚に塩をまぶして焼いただけのようだ。

しかし、宿のある町は割と海に近いためか、魚の鮮度がいい。なのでシンプルな料理でも素材の味が存分に生かされていて、おいしいのだろう。

カチコチパンが出てきたものだから、あまり期待していなかったリサだが、予想を上回る味に驚きを隠せない。

二口ほど続けて焼き魚を味わってから、スープに口をつけた。

「……」

スープを飲み込んだリサは、思わず苦い表情になる。

出汁をとらず、塩味のみで味つけされたスープ。そこに、くたくたに煮込まれたシューゼットが浮かんでいる。

焼き魚がおいしかっただけに、味の落差が激しく、リサは頭を抱えたくなった。

この世界では、手の込んだ料理ほど、味が損なわれる傾向にある。むしろこの焼き魚のように、新鮮な素材にシンプルな味付けをしただけの料理の方がおいしいということが

多々あった。
つくづく不思議に思う。
それにしてもと、リサはこの世界に来てからのことを懐かしむ。
最近はカフェ・おむすびの影響もあってか、王都にある飲食店のレベルが上がったと感じていた。
アシュリー商会でレシピを販売しているだけでなく、リサ自身も王宮の料理人をはじめ、他のお店の料理人の相談に乗ったりすることが頻繁にあり、それが実を結び始めている。
今日こうやって王都の外に出てみて、それを顕著に感じた。
噛み切れないような硬さのパンに、コクも旨みも感じられないスープ。この世界に来た時はこんな料理ばっかりだったなあと思い出す。
それはリサばかりでなく、他のメンバーも同様だったらしい。
「慣れって怖いな……」
ジークが口元を押さえながら、ボソッと呟いた。
「私もそう思いました」
ヘレナの顔には苦笑が浮かんでいる。

アランにオリヴィア、ヴェルノまでがどこか沈んだ空気を漂わせる中、御者のバートラムだけが不思議そうな顔で、パクパクと食べ進めていた。

第三章　思わぬハプニングが起こりました。

微妙な夕食から一夜明けて、いよいよ目的地であるスーザノウルに向かう。
幸い天気もよく、早朝から青空が広がっていた。
「お昼くらいには着きますかね？」
昨日と同じく馬車に揺られ、スーザノウルへの道を進む。リサが御者席の後ろにある小窓から、バートラムに状況を確認した。
「このまま順調にいけばそのくらいですね。国境はもうすぐですよ」
バートラムの言葉通り、しばらくすると、前方に関所のようなものが見えてきた。
それは石造りの建物で、中央にあるアーチ形の門の扉が開け放たれている。
馬車はスピードを緩め、騎士団の制服を着た男性の前で停車した。
「出入国許可証を確認します」
リサは全員分の出入国許可証を集めると、騎士団の男性に近い座席にいるジークに手渡した。

リサの意図を汲んだジークは窓を開け、全員分の書類を差し出す。
「お預かりします」
そう言って書類を受け取った男性は、ジークの顔を見て目を見開いた。
「も、もしかしてジークさん!?」
やや裏返った声を上げた彼。
「ん？　お前、コナーか？」
「そうです!!　お久しぶりです!!」
コナーと呼ばれた男性は嬉しそうに、ジークの方へ近寄った。
「ジークくん、知り合い？」
リサがジークの後ろから顔を覗かせると、騎士団の帽子をしっかりかぶってはいるものの、ややそばかすの目立つ童顔の男性がリサを見上げていた。
「騎士団時代の後輩だ」
「そうなんです！　まさかこんなところで会えるなんて、思ってもみませんでしたよ。懐かしいな～」
思いがけずジークと会えたことが嬉しかったのか、コナーはニコニコしている。

「ジークさん、今は料理人をしてるんですよね？」
「そうだ。勤めているカフェのメンバーで、スーザノウルに行く途中だよ」
ジークの言葉によって、コナーは渡された書類の存在を思い出したのか、ハッとして手元に視線を向けた。
「忘れるところでした！　すぐ確認しますね」
彼はそう言って、書類に不備がないか確かめてから、馬車に乗っているメンバー一人一人の名前を呼んで人数などをチェックする。
御者のバートラムの書類は貸し馬車協会のものなので、手続きが違うらしく、リサたちとは別に確認していた。
「はい、問題なしです。書類お返ししますね」
コナーは書類にスタンプのようなものを押して、ジークに返す。
「ありがとう」
ジークがお礼を言うと、彼は恐縮した様子で手を振った。
「いえいえ、仕事ですから！　ジークさんたちも道中お気をつけて」
「ああ、頑張れよ」

「はい!!」
コナーはスーザノウル側でも同様の手続きがあることを伝えると、笑顔でリサたちを見送る。
再び動き出した馬車に向かって、ブンブンと手を振っているのが見えた。
リサがそれに気付いてジークに教えると、彼は珍しく表情を緩め、片手を上げてそれに応えていた。
コナーが言った通り、スーザノウル側でも同様の手続きがあり、リサたちは問題なく国境を越えることが出来た。
「やっぱりこのあたりは暑いですね」
ヘレナが、開け放った窓から吹き込んでくる風を浴びながら言った。
スーザノウルに近づくにつれて、徐々に温暖になっていった気候。夏でもそれほど暑くないフェリフォミア王国とは違い、スーザノウルは夏らしい日差しとそれに伴う暑さが感じられる。
街道沿いに生えている植物も、どこか南国チックなものが多かった。

「夏って感じだね〜」
リサも体が汗ばむのを感じる。
王都にいた時より格段に暑いが、湿気はあまりないためカラッとしていて、そこまで不快感はない。
「もう少しで宿に到着しますよ」
バートラムが振り向いて言った。
馬車は目的地である人気リゾート地、マスグレイブ領に入っていく。
そして太陽が南中を過ぎた頃、リサたちが乗る馬車は宿泊予定の宿に到着した。
宿は、四階建ての大きな建物だった。
フェリフォミア王国の欧風な建築様式とは違い、白い漆喰の壁が南国っぽさを感じさせる。
観光名所でもあるビーチからは少し離れているものの、街の中心に立つこの宿は評判がよく、人気もあるため、ヘレナとオリヴィアの勧めでここに決めたのだ。
リサたちは馬車をエントランスに停めてもらい、チェックインの手続きをしにフロントへ向かう。

白を基調とした室内は広々としていて、木目調のインテリアやフェリフォミア王国では見ない種類の観葉植物などが、異国感をかもし出していた。
「すみません、予約しているカフェ・おむすびですが」
カウンターの中の従業員に、リサが代表して話しかける。受付係の男性従業員はにっこりと微笑み、うやうやしく会釈した。
「いらっしゃいませ。カフェ・おむすび様ですね」
「そうです」
「お待ちしておりました。チェックインの手続きをさせていただきます」
そう言って、専用の記入用紙をリサの前に差し出してくる。
代表者であるリサが名前や住所などを記入していると、馬車から荷物を下ろし終えたジークがやってきて、その隣に並んだ。
「みんなは？」
「あっちで待ってるって」
ジークが指さした方を見れば、ロビーに置いてあるソファに四人が座っていた。近くにある観光案内のパンフレットのようなものを見て、何か話している。

それを確認したリサは、用紙の記入を進める。
やがて書き終えると、それを従業員に手渡した。
「お預かりします」
用紙を受け取った従業員は、宿泊名簿をチェックし始めた。
リサはジークと一緒にその様子を眺める。
まだかな〜と思っていると、従業員がハッとして顔色を変えた。
それはほんの一瞬のことで、彼はまたすぐに笑みを浮かべてリサたちに視線を向ける。
「申し訳ありませんが、よろしければソファにお掛けになってお待ちください」
「あ、はい」
少し訝しく思いつつも、リサとジークは男性の言葉に従い、他のメンバーがいる場所へと移動した。
「チェックインできた？」
オリヴィアが二人に気付き、声をかける。
「ううん。なんか座って待ってるように言われたんだけど……」
そう言いながらリサがフロントの方を見ると、応対していた従業員がもう一人と何か

話していた。
若干焦っているようにも見えて、リサは不安になる。どう見ても様子がおかしい。
しばらくすると、応対していた従業員ともう一人がカウンターから出て、リサたちのもとへやってきた。
「カフェ・おむすび様ですね」
口を開いたのは応対していた従業員ではなく、もう一人の方だった。
「はい、そうですが……」
「私は、この宿の支配人のサーキスと申します」
「はぁ、支配人さんですか」
いきなり支配人が出てきて戸惑ったリサは、気の抜けた返事をする。
「お待たせして申し訳ございません。このたび、私どもの方で不手際があり、ご予約いただいていたお部屋をご用意できかねてしまいまして……」
「え!?」
「大変申し訳ございません!!」
支配人と従業員が揃って頭を下げる。

部屋が用意できていないとはどういうことだろう。
ぽかんとするリサに代わって、隣にいるジークが口を開いた。
「どういうことですか？」
やや険のある言い方をしたジークに、彼らは困った表情で返答する。
「三部屋ご予約いただいておりましたが、こちらの不手際で、一部屋しかご用意できておりませんで……」
「何とかならないんですか？」
「このところ連泊のお客様が多く、既にお部屋に入られておりますので……」
再度頭を下げる支配人と従業員を前に、リサたちは途方に暮れた。
「どうする？」
ジークがリサに問う。
「……どうしようか。空いてないものは仕方ないし……一部屋だけじゃねぇ……」
元々予約していたのは、ツインルームを三部屋。
リサとヘレナ、ジークとアラン、オリヴィアとヴェルノに分かれて泊まるつもりだった。
御者のバートラムは別の宿に泊まるので、荷物を下ろした後、そちらに向かってしまっ

ている。
おそらく用意できている一部屋というのはツインルームだろうが、そこに六人で泊まるのはどう考えても無理だった。
「あの、近くに空いている宿ってありませんかね？」
リサが困惑しきった顔で支配人に尋ねると、彼は下げていた頭を上げた。
「何とか探してみます！」
そう言って従業員を引き連れ、フロントの方へと駆けていく。
待つのに飽きたのか、しきりに「まだ～？」と聞いてくるヴェルノを宥めながら、待つこと数十分。
ようやく支配人が戻ってきた。
「大変お待たせいたしました」
「見つかりました？」
「はい、一軒だけありました。海風亭という宿で、ビーチのすぐ近くです。よろしければこれから馬車で送らせていただきますが、いかがでしょうか？」
支配人の言葉を受け、リサは他のメンバーの顔を窺った。

みんな異論はないらしく、頷いている。
「では、お願いします」
リサが答えると、支配人はほっとした様子で肩の力を抜き、馬車乗り場まで誘導し始めた。
彼が言うには、明後日以降は部屋が用意できるという。今日と明日の宿泊代は、不手際があったお詫びに負担してくれるらしい。
海風亭という宿がどんな宿かはわからないが、このバカンスシーズンに急遽泊まれただけでもラッキーかもしれないとリサは考え直す。
それに宿泊代も二日分浮くので、逆に儲けたかもしれないと開き直った。
しかし、一方で――
「もう！　私、ちゃんと予約したのに！」
ヘレナは納得いかないらしく、ぷりぷりしている。自分が予約したこともあり、なかなか怒りが収まらないようだ。
「まあまあ、ヘレナ。明後日からは泊まれるっていうし、もしこれから行く宿の方がよければそのまま泊まってもいいみたいだし。ね？」

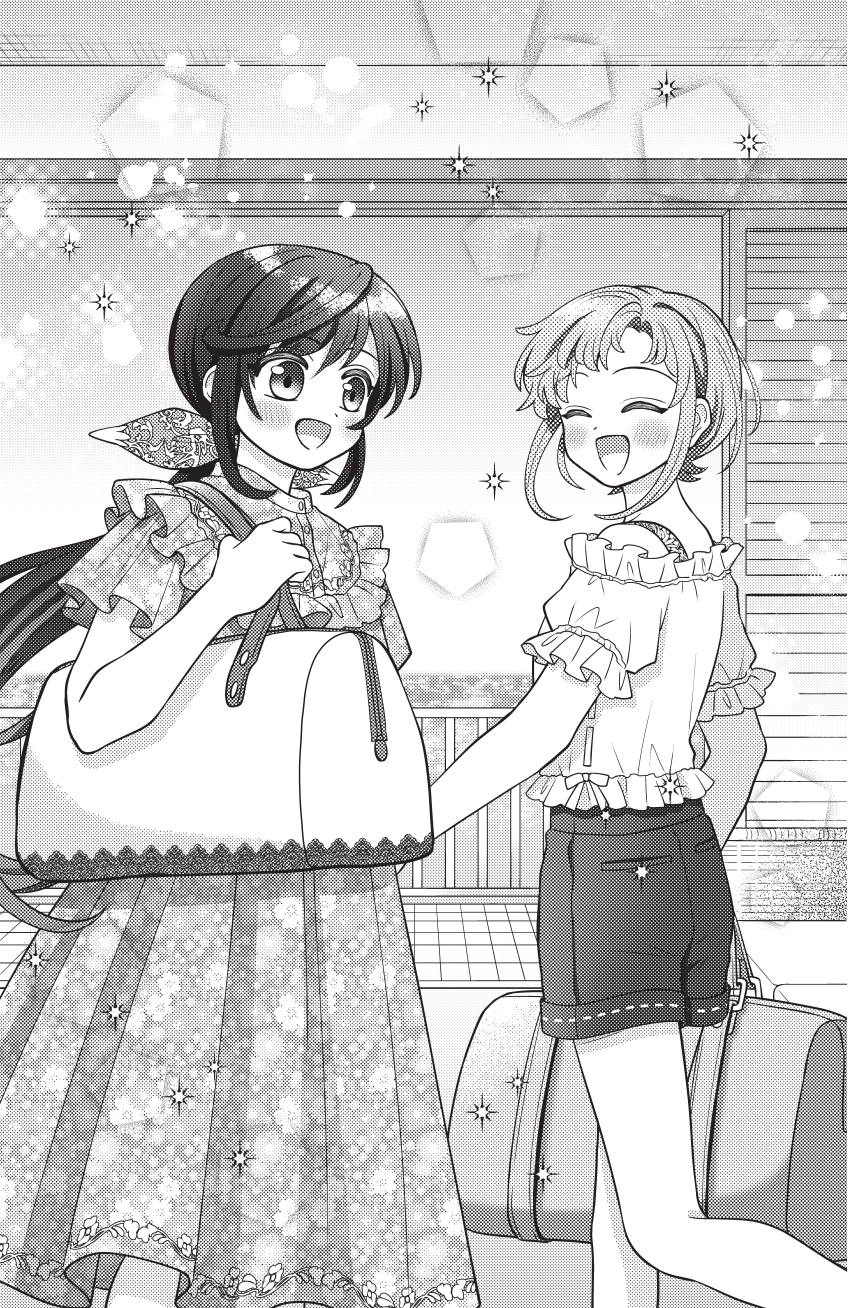
「それはそうですけど……」
リサが宥めても、ヘレナはまだ憮然としていた。
そうして再び乗り込んだ馬車は、街中を海岸の方へ向かって進んでいく。
開け放たれた窓から吹き込む風に、潮の香りが混じり始める。
リサが前方を見ると、まっすぐに伸びた水平線が見えた。
「うわぁ、海だ……」
久々に目にする海に、自然と感嘆の声が漏れる。
「あれが海？」
「そうよ」
海を初めて見るヴェルノは目をキラキラと

輝かせ、オリヴィアに問いかけていた。
遠かった海岸線がかなり近づいた頃、馬車は停車した。
「こちらです」
御者の声に促され、リサたちは馬車から降りる。
目の前にあったのは、小さいながらも歴史のありそうな佇まいの建物。先程の宿とは違い、平屋建てだった。
「なかなかよさそうねぇ」
オリヴィアがしみじみと呟いた。
洗練された雰囲気はないものの、すぐ近くに見えるビーチや南国風の街並みにマッチしたその宿に、好印象を抱く。
リサたちが宿の前に立って外観を眺めていると、繊細な木彫りが施された入り口の扉が開いた。
中から出てきたのは、三十代くらいの男女。この地方に住む人々の特徴なのか、街中で見た人たちと同じく、二人とも小麦色の肌をしていた。
「いらっしゃいませ。カフェ・おむすび様でしょうか？」

「そうです」
リサが答えると、男性が顔を綻ばせた。
「お待ちしておりました。海風亭へようこそ。ささ、どうぞ中へ」
そう言って彼は全員分の荷物を預かり、女性が中へと案内してくれる。
中に入ると大きな窓があり、すぐ目の前にエメラルドグリーンの海が広がっていた。
「うわぁすごい!!」
これには先程まで怒り心頭だったヘレナもすっかり機嫌を直したようで、眼前の風景にただただ目を奪われている。
この場所は一階かと思いきや、二階らしい。
宿は丘の上に建てられており、街の方からは平屋にしか見えないが、海側から見ると二階建てという変わった造りになっていた。
ロビーがあるのは、その二階部分だ。高さがあるので、ロビーの正面にある大きな窓からは、綺麗な海を見ることが出来た。
「気に入っていただけてよかったです」
景色のよさに見とれるリサたちを、宿の女性が微笑ましそうに見つめている。

「すみません。あまりにすごい眺めだったので……」
リサがハッと我に返って言うと、彼女は笑みを深めた。
「うちの自慢の眺めですので、そう言っていただけて光栄ですよ」
彼女は言葉通り誇らしげに見えて、リサも嬉しくなる。
「ああ、申し遅れましたが、私は女将のマリアです。先程ご挨拶させていただいたのは主人のクリフです。どうぞ何なりとお申し付けくださいね」
マリアと名乗った女性は、リサたちに向かってにっこりと微笑んだ。
「こちらこそ、お世話になります」
横に結んだ山吹色の髪が健康的な小麦色の肌にぴったりで、夏の陽気みたいな雰囲気を持つ人だな、とリサは思う。
眺めのいいロビーでしばらく待っていると、馬車から荷物を下ろしていた男性陣がやってきた。
「お待たせいたしました」
宿の主人であるクリフが荷物を載せたカートを押しながら、ジークやアランとともにリサたちのもとへ近づいてくる。

先程案内してくれたマリアが夏の陽気だとするなら、クリフは夏の夕暮れといった感じだろうか。短めの髪が夕日のような朱色をしているのだ。
彼は改めて名乗ると、マリアとともにリサたちを部屋へと案内し始めた。
部屋はロビーと同じ階にあるらしく、廊下を進むと、宿の入り口と同じような木彫りのドアが並んでいた。
「お二人ずつ三部屋のご利用とお聞きしていますが、よろしいですか？」
「はい、大丈夫です」
クリフの問いにリサが頷くと、彼は客室の鍵を開けた。
「どうぞお入りください」
「じゃあ、ここは私とヘレナでいい？」
他の四人が頷いたのを見て、リサはクリフから鍵を受け取る。
「何かわからないことがありましたら、フロントへお越しください。それと、食堂はこの下の階になりますので」
「わかりました。それじゃあ、みんなあとでね」
リサはヘレナと一緒に部屋の中へ入った。



「おお！　お部屋も綺麗ですね!!　それに眺めもいい!!」
先に入ったヘレナが部屋を見回して、嬉しそうに言う。
ナチュラルな木目調の家具で統一された室内。左手にはベッドが二つ並び、右手には木を編んで作られた二人掛けのソファがある。ロビーと同じ階なので予想はしていたが、窓からはキラキラと太陽の光を反射している綺麗な海が見えた。
「もしかしたら、さっきの宿よりもいいんじゃない？」
「そうかもしれないですね」
リサが茶化すように言うと、ヘレナも少し笑いながら答えた。
ひとまず荷物を部屋の隅に置き、窓を開ける。
窓の外にはテラスがあった。窓を開けた途端にふわりと吹いてきた潮風に誘われて、リサはテラスに出る。
すると同じタイミングで、隣の部屋からも人が出てくる気配を感じた。
「あ、ジークくん」
「リサさん」
隣のテラスに出てきたのはジークだった。部屋の中にはベッドに大の字になっているア

立ち読みサンプル
はここまで

ランが見えて、リサは小さく笑う。
「素敵な宿でよかったね」
「そうだな。何より泊まれるところがあってよかった」
「バカンスシーズンだから、他の宿はいっぱいみたいだしね」
「ああ、だが……」
ジークはそこで言葉を止め、何やら考え込んでいる。
「どうしたの？」
「いや、バカンスシーズンなのに、なぜここは他の客がいないのかと思って……」
「確かにそれらしい気配はないね」
着いたばかりではあるが、他の客の姿を見かけない上に話し声などもせず、宿泊客の気配は感じられない。これほどいい立地で、部屋も綺麗で悪い部分が見当たらない宿なのに、バカンスシーズンに空きがあるというのは不思議に思う。
知る人ぞ知る隠れ家的な宿なのか、それとも直前でキャンセルが出たのか……
ジークの言葉に触発され、リサも考え込む。
「……まあ、考えすぎかな？」

リサの意識を引き戻すように、ジークが軽い調子で言った。
「そっかな？　はじめから躓いちゃったせいで不安になるのかもね。ようやく落ち着いたし、楽しまなきゃ！」
リサも考え込むのをやめ、ジークの顔を見上げた。せっかくの旅行だしと微笑むリサに、ジークの頬も緩む。
しかし、二人が不審に思ったことの理由が、後に明らかとなるのだった。